

本の紹介

川幡穂高著「気候変動と「日本人」20万年史」
岩波書店, 250p, 2022年4月13日発行
2,000円(税別), ISBN978-4-000-61530-3

地球惑星科学の分野のなかでも、地球化学の特徴の一つは時代を軽々と飛び越えられることである。もちろん、本人にその気があって頑張れば、という注はつく。

川幡穂高の二つの著書、『海洋地球環境学—生物地球化学循環から読む』(2008), 『地球表層環境の進化—先カンブリア時代から近未来まで』(2011)は、自身が「授業の見える化」と語るとおり、大学での授業内容を中心にまとめられたものだ。先に述べた「時代を飛び越える」感覚は、後者の副題「先カンブリア時代から近未来まで」にも端的に表現されている。

川幡は、海底熱水鉱床の研究でキャリアをスタートさせ、その後、第四紀の古海洋学・古気候学で華々しい成果を上げ続けてきた。いわば時代だけでなく分野の壁も飛び越えたことになる。そして、東京大学大気海洋研究所で定年を全うするまでの十数年間は、ホモ・サピエンスが生きてきた時代をターゲットに定めた。今回紹介する『気候変動と「日本人」20万年史』は、文字通り、過去20万年間(チバニアンの後半から現在まで)を対象とし、サピエンス、とくに東アジアと日本列島に暮らす人々が、どのような気候変動のなか生きてきたのかが論じられている。

この本の最大の特徴は川幡とそのチームが復元した気候変動データを元に環境変動史・人類史が議論されているという点である。単なるレビューだけではない。別な言い方をすれば、本書は川幡とそのチームによって出版された多数の論文のエッセンスに他ならない。

AIの発展により、外国語で書かれた研究論文も一瞬で母国語に翻訳でき、さらに概要まで吐き出してくれる時代となってしまった。その時代にあっても、著者自身の手で、研究の背景も含め一つのストーリー性を保ちつつ、研究の全体像を総括してもらえることは、大変ありがたい。

もう一つの特徴は、広範囲な分野の膨大な数の文献を参照し、比較検討している点である。巻末につけられた参考文献のリスト、また本文中での引用をみれば明らかだ。

冒頭、「地球化学の特徴の一つは時代を軽々と飛び越えられること」と書いてしまったが、それは分析までの話である。データが出て、それを解釈・論文化しようとした時点で事態は一変する。飛んだ先の時代にはもちろん先人がいて、山のような研究成果が公表されているからだ。

川幡は、労を惜しまず、丹念にレビューを行っており、それも本書に十分反映されている。サピエンス史を扱う以上、最先端の遺伝子研究からいわゆる文系の著作も含めてである。以前、氏から「大学院時代の愛読書は司馬遷の『史記』だった」と聴き、度肝を抜かれたことがあったが、培われた読書習慣は十二分に生かされたかたちだ。

さらに、川幡のもう一つのこだわりである「食」も、本書に色濃く表現されている。とくに、栗の半栽培を發明し、かつ世界ではじめて海鮮鍋をつついた縄文の人たちに対する表現は、畏敬の念に溢れたものとなっている。また、水田稲作が日本列島に移入され、広がっていった経緯については、その背景も含め詳細に論じられている。加えて、獣肉食が禁忌されていた時代、それらを食することを我慢できなかった人々へのまなざしも優しい。

人間、とくに東アジアと日本列島に暮らす人々が経てきた歴史を地球環境変動史という文脈で丹念に追った力作。ぜひお勧めしたい。

引用文献

- 川幡穂高(2008): 海洋地球環境学—生物地球化学循環から読む—。東京大学出版会, 東京, 280p.
川幡穂高(2011): 地球表層環境の進化—先カンブリア時代から近未来まで—。東京大学出版会, 東京, 308p.

(茨城大学 伊藤 孝)

2024.7.26 受付

2024.09.04 学会ニュースレーター公開

2024.09.04 学会ホームページ公開